

## 読書通信



No. 121

① 歴史の勉強と小説の面白さを両立させてくれる点で歴史小説は読書の魅力の中で最右翼と思うが、そうはいっても史実として正確な傑作小説というのには限られる。司馬遼太郎でさえ史実という点では問題なしとしないので日本人の明治史観が心配されなくもない。筆者の好みをいえばこの欄でかつて激賞した『終わらざる夏』と『蒼穹の昴』『中原の虹』だろうか。

その浅田次郎『日本の「運命」について語ろう』（幻冬舎、1296円）は江戸・明治・昭和、そして中国近代史の該博な知識を披露しつつ、歴

史を見る目とはどのようなようであるべきか、歴史から何を学ぶべきか、そして日本および日本人について講演したものが基本になっている。作家が講演を文章にするというのは極度に難しいものである以上、ある意味でこれは労作と言えるのだろう。時代背景や事実関係を徹底的に調べて執筆していることがよくわかり、浅田作品を信頼してきたことは正しかったと改めて感じた。知らなかった事実もたくさん教えられた。ポリユーム的にも手頃なお勧めの一冊である。

② 核兵器には圧倒的に反対する日本人なのに、原発となると「できるだけなくしたほうがいい」という微温的意見が多数を占めるのはなぜだろうか。実は「原子力の平和利用」は広島、長崎の悲劇から10年と経たないうちに語られ始

めた。そして核アレルギーは薄まり、原子力発電全盛期が訪れる。そこにはメディアやサブカルチャーの果たした強力な役割があった。

山本昭宏『核と日本人』（中公新書、950円）は、ゴジラや鉄腕アトムなどの映画、アニメ、マンガが原子力をどう扱ってきたか、そして新聞論調がどのように変化したかを紹介しつつ、国民がどう受け止め、それらにどう影響されてきたか、を丹念に追っている。原発に賛否いずれの立場であっても、原子力をめぐる歴史を直視することの重要さを痛感させられる。

③ なんとも切ない書名だ。菊池寛賞などを受賞した毎日新聞特別報道グループ『老いてさまたち』(毎日新聞社、1512円)は他人事ではない。さまざまなのは認知症の人たち。施設に閉

じ込められる老人、街をうろついて踏切事故に遭う老人、保護され名前も年齢もわからず仮の名で寂しく過ごす老人。そんな厳しい現実を新聞記者が根気良く取材していく。明日は我が身、明日日は我が家族、厳しい問題提起を受け止めない社会や政治に明日はないと痛切に思った。

④ 4月に両陛下がペリリュー島へ慰霊訪問されると知り平塚枢緒『玉砕の島々』(洋泉社、1836円)を読んだ。石橋湛山の次男が戦死したクエゼリン島からサイパン、グアム、ペリリュー、そして硫黄島、沖縄まで。劣悪な装備で時に健闘し、多くは孤立無援の中で「玉砕」した兵士たちの姿が描かれる。戦後70年、無謀な戦争の歴史から何を学ぶべきかを知る格好の書。戦中戦後の兵士の降伏のドラマも面白い。(純)